サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の鉄柱とゴシック建築の柱の関係 —— 1850年前後のパリに建設された3つの建築をめぐって ——

RELATIONSHIP BETWEEN THE CAST-IRON COLUMNS OF THE SAINTE-GENEVIÈVE LIBRARY AND THE COLUMNS OF THE GOTHIC ARCHITECTURE

—Three architectures built around 1850 at Paris—

加藤 耕一*
Koichi KATO

Designing the Bibliothèque Sainte-Geneviève (BSG), H. Labrousse was inspired by the 13th century gothic architecture which was then renovated into the library of Conservatoire National des Arts et Métiers (CNAM). This paper reveals that the unique slender cast-iron columns of the BSG were influenced by the gothic columns of the CNAM. Right after the BSG, L.-A. Boileau also built the iron church copying the columns of the same gothic architecture. Therefore, it could be concluded that there was an influence of the gothic architecture on the birth of the “architecture” in iron, especially on its cast-iron columns.

Keywords : Bibliothèque Sainte-Geneviève, H. Labrousse, L. Vaudoyer, L.-A. Boileau, E. Viollet-le-Duc, Architecture in Iron

サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館、H. ラブルースト、L. ヴォードワイエ、L.-A. ボワロー、E. ヴィオレ＝ル＝デュク、鉄骨造建築

1. 序

1926年にL. デュベックとP. デスプゼルは、共著『パリの歴史』において以下のように記した。

「1878年頃、人々は鉄骨の建築に救いを見出したと思った……(略)……垂直への憧れ、中身の詰まったものに対する空っぽなものの優越、そして外から見える骨組みの軽やかさは、一つの様式が生まれようとしているという期待を抱かせた。この様式の中に、ゴシック精神の主要なものが、新しい精神と新しい素材によって蘇るかもしれないというのである。〔ところが〕技師たちが1889年に機械館とエッフェル塔とを打ち立てたとき、人々は鉄の芸術に見切りをつけてしまった。だがたぶん、その判断は早すぎた¹⁾。」

ここで言及されているのは1878年と1889年のパリ万博における鉄骨の博覧会建築である。だが本稿は、これに先行する1850年前後のパリに焦点を定め、そこで修復、改築されていた1つのゴシック建築と、同じ頃に建設された2つの鉄の建築に着目し、三者の関係について考察するものである。

2. 本稿の考察対象

フランスにおける鉄の建築の揺籃を考えるうえで、アンリ・ラブルーストのサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館(1851年開館)は、きわめて重要である。むしろ、ラブルースト以前のフランスにお

いて、鉄を用いた建築がなかったわけではない²⁾。1786年には早くもV. ルイによってテアトル・フランセの小屋組に鍛鉄のトラスが用いられているし、1811年に建築家F.-J. ペランジェによって改築された穀物市場においても、技師ブルネによる鉄と銅の混構造のドームが建設されている³⁾。しかしながらこれらの構造物についてS. ギーディオンは以下のように述べる。

「だが少なくともそれは、実際には鉄骨構造というよりは、鉄が使われているというだけのものだった。木造の構造を鉄に応用したに過ぎなかったのである⁴⁾。」

これらの建築をフランスの鉄骨建築の前史に位置づけたギーディオンは、「その後の発展に先行する最初の建物は、アンリ・ラブルーストによるサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館である⁵⁾」と断言する。

ラブルースト以前、鉄は直接目に触れにくいところで用いられる場合が多く、例外は鉄橋のような土木構造物か、温室建築のような19世紀前半に登場した新しいビルディング・タイプで見られるのみであり、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館のような記念碑的な建築で堂々と鉄が用いられることは稀であった⁶⁾。ラブルーストのこの建築の革新性について、B. フーカールは若干大袈裟とも思える表現で次のように述べる。

「真の謎を強調しておくべきであろう。すなわち、建築システムに直

* 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
研究生・博士(工学)

Researcher, Department of Architecture, Graduate School of Engineering,
University of Tokyo, Dr. Eng.

接的に結びつけられた高度なプログラムのなかでの、システムティックな鉄の使用である。先例は存在しない……(略)……もちろん、小屋組や橋梁、そしていくつかの駅などを思い起こさせることはできる。しかしながらラブルーストがそこからインスピレーションを受けた先行例や同時代の直前の実例を見出すことはできない。それこそが彼の天才であり、革新である……(略)……このようにして、この斬新な表現は、金属によって可能となった円柱の細さのおかげで、閲覧室の広さと透明性という2つの要求を満たしたのである⁷。」

本稿では、ラブルーストの「建築システム」に踏み込むことはせず、主として「金属によって可能となった円柱の細さ」に注目する。1850年代、铸铁は圧縮に強いという認識から、細い支柱で大空間を支持する建築がその数を増していた。それらの建築のなかでも、ラブルーストのサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の原案は、後述するように1839年には既に固まっており、他の鉄の建築と比べてもひととき早い時期のものであるといえる⁸。本稿ではこの建築空間に影響を与えた先例を、鉄の構造物に求めるのではなく、同時期のパリで修復が進められていたゴシック建築であるサン＝マルタン＝デ＝シャン修道院の食堂に求めようとするものである。

1850年代は、鉄を用いた建築が一齐に花開いた時代であった。サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の開館はロンドンの万博会場としてクリスタル・パレスが登場したのと同年であったし、その後も、パリでは1854年の中央市場⁹、1855年のパリ万博産業宮(Palais de l'Industrie)¹⁰など、鉄の世紀を印象付ける建築が次々に建設されていった。それらの建築のなかから本稿では、仮設的な新しいビルディング・タイプの建築ではなく、モニュメンタルな建築における鉄の使用という点でサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の後継的存在と位置づけうるルイ＝オーギュスト・ボワローのサントウージェヌ教会堂をとりあげる¹¹。そしてフランスで最初の鉄のゴシック・リヴァイヴァル建築¹²となったこの建築が巻き起こした議論のなかに当時の識者たちの鉄の建築に対する態度を探るとともに、ゴシック建築と鉄との関係をここでも考察することとする。

3. サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館と国立工芸学院の図書館

本稿においてまず注目したいのは、同時期に開館した2つの図書館建築、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館と国立工芸学院(Conservatoire National des Arts et Métiers)の図書館の類似である。

ラブルーストが鉄を用いて革新的な図書館を建設したのに対し、もう一方の国立工芸学院の図書館は、ラブルーストの友人であったレオン・ヴォードワイエが13世紀のゴシック建築を修復し、そこに図書館の機能を挿入したものである。

どちらの図書館の閲覧室も、長方形平面を中央の円柱列によって2廊に分割する構成を有している。ラブルーストの閲覧室は天井が金属の半円アーチによって支えられたトンネル・ヴォールトで覆われ、ヴォードワイエの閲覧室はゴシックのリブ・ヴォールトによって覆われている。2廊を分かつ円柱は、ラブルーストのものは铸铁、ヴォードワイエのものは石材という相違はあるものの、どちらも極端に細く背の高いプロポーションを有することから、同様のきわめて軽やかな印象を作り出している。

これら2つの図書館建築の空間構成の類似については、オープンの1年後に早くも、建築の雑誌 *Revue général de l'architecture* のディレクターを務めるセザール・ダリーによって指摘されている。

「かつてのサン＝マルタン修道院の食堂の広間が、最近、建築家ヴォードワイエ氏の指揮によって修復され、図書館に改造された。この美しい広間の長軸方向は……(略)……際だった軽やかさの円柱の列によって占められている。閲覧用のテーブルはこれらの円柱のあいだに置かれ、本棚は壁に面して立てられている。この配置は、学院の新しい図書館と同様、軽やかな円柱の列によって中央を分割されたサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館とのあいだに、大いなるアナロジーを作り出している¹³。」

しかしながらヴォードワイエによって修復された国立工芸学院の図書館からサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館への影響の有無を、ラブルースト自身の言説から明らかにすることはできない。彼はこの建築について、C.ダリーに宛てた手紙において自ら説明しており、その手紙は *Revue général de l'architecture* に掲載された。この手紙のなかで、ラブルーストは次のように述べている。

「そのうえ、ご存じの通り私は執筆というものが、殊に自らの成果を語るためにものを書くことが好きではありません。また、すでに成されたことにかまけるといふのは私の趣味ではなく、これから成されることに取り組むことの方を好みます。私は自分の後にあるものよりも前にあるものを見ていたい。ですから、すでに2年も前に完成しているサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館について、私が語ることはほとんどないという訳です¹⁴。」

このような書き出しで始まるラブルースト自身によるサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の解説は、決して短いものではないが、こ

図1：サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館 図2：国立工芸学院の図書館

図3：サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館、平面図(上)

図4：国立工芸学院の図書館、平面図(下)

図5：サントウージェヌ教会堂

の建築の建設の経緯から各部屋の装飾や家具に至るまで、まんべんなく、しかしきわめて簡潔に説明したものであり、後の批評家たちが称賛するもととなった「システムティックな鉄の使用」を取り立てて詳述するというものではなかった。実際、この建築の中心的な空間である閲覧室の建築的な説明は以下の段落のみである。

「図書館の2階に配された大広間は、この建物の全面積を覆っています。すなわち、84.75 m×21 mであり、1779.75 m²となります。この部屋へは、鑄鉄の扉から入ります。本は部屋の周囲に5 mの高さに並べられ、これが地面から2.5 m高さにめぐらされた通廊によって二分されています。これにより、すべての部分が移動式ハシゴ無しでアクセス可能となっているわけです。いくつかの小さな小部屋が、部屋の周りのヴォールトを受ける控え壁のあいだに設けられています。この広間は、この空間全体を覆っているヴォールトを受けて支える18本の鑄鉄の円柱の連なりによって、2つの平行する身廊へと分けられています。これらの鑄鉄の円柱は、石の台座の上に立てられており、それらのあいだには本を収めるための高さ2.5 mのキャビネットが置かれています¹⁵⁾。」

金属による構造を視覚化する鑄鉄の支柱について、ラブルーストは僅か一文で説明するのみである。しかもラブルーストは、その支柱の数が実際には16本であるにも拘わらず18本と記述する誤りまで犯している。「すでに成されたことにかまけるというのは私の趣味ではない」というラブルーストの言葉通り、後世の歴史家たちが絶賛した鉄の構造システムの革新性すら、彼にとってはすでに興味が失われた過去の出来事に過ぎなかったということであろうか。

続いて以下では、2つの図書館建築の並行関係、類似点などを詳細に見ていくこととする。

4. 2つの建築の並行性

4-1. ラブルーストとヴォードワイエの親交

アンリ・ラブルースト（1801-75）は、1819年にエコール・デ・ボザールに入学し、A.-L.-T. ヴォードワイエとH. ルバのアトリエで建築を学んだ¹⁶⁾。A.-L.-T. ヴォードワイエの息子レオン・ヴォードワイエ（1803-72）もまた1819年にボザールに入学し、ラブルーストと同じ、父とその甥が指導するアトリエに入っている¹⁷⁾。ラブルーストは1824年にはボザールにてグランプリを獲得して1824年から1830年にかけてイタリアに滞在し、ヴォードワイエは1826年にグランプリを獲得して1827年から1832年にかけてイタリアに滞在している¹⁸⁾。特に1827年から28年にかけて彼ら2人はF. デュバン（1823年グランプリ獲得）、L. デュク（1825年グランプリ獲得）とともに4人でローマにて活動していた¹⁹⁾。

4-2. 2つの建築の時間的な並行性

1830年にローマからパリに戻ったラブルーストはイタリアで働いていたデュバンの下で働き始めるが²⁰⁾、ギーディオンの言葉を借りれば、「12年のあいだ、ただ1つの建物を任されることもなくパリをぶらついて²¹⁾」おり、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館は彼自身が手掛けた最初の本格的な建築作品となった。1838年6月、ラブルーストはサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の建築家に任命され、10月には同図書館のコレクションのために新しい建物の設計を命じられる。ラブルーストは、翌1839年12月19日に最初の設計案を営繕局（Conseil des Bâtiments civils）に提出する。同案は1840年1月23日と25日に営繕局によって確認、承認されるが、フランス下院でのプレゼンテーションは延期された。さらに1842

年11月21日には、ラブルーストによる最初の案が再び営繕局によって承認される。翌1843年4月10日になり漸く下院での承認が得られ、同年7月19日に予算が確定、8月1日より基礎工事が始まることになる²²⁾。1846年3月には1階の組積造部分が完成、5月からは2階部分の建設が始まり、1847年の8月から12月にかけて閲覧室の天井を支える鉄構造が実現した。その後、装飾、調度品、さらには暖房設備の作業などを経て、1851年2月4日にサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館は開館した²³⁾。

一方のヴォードワイエもまた、ラブルーストがサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の建築家に任命されたのと同じ1838年6月に国立工芸学院の建築家に任命される²⁴⁾。彼の最初の設計案はラブルーストの第1案と同じく1839年12月に提出された。さらに1843年1月19日に提出された案が翌1844年4月27日に承認されている。ヴォードワイエが手掛けた国立工芸学院および同美術館の建築群のうち、本稿で着目している図書館の閲覧室は、1845年から49年にかけてもともと修道院の食堂だったゴシック様式のホールが修復され、1850年に彩色および絵画による装飾が施された後に、開館した²⁵⁾。

4-3. 建築的な類似点

以上のごとく、これら2つの建築は親交のあった2人の建築家によって、まったく同時期に建設されたものであった。フランスで初の試みであった、純粋に図書館という機能だけのための建築を計画していたラブルーストが²⁶⁾、旧友のヴォードワイエが国立工芸学院の敷地でいかなる図書館を計画しているのか²⁷⁾、話をしたり現場となる旧サン＝マルタン＝デ＝シャン修道院の食堂を見学したりした可能性は否定できない。両閲覧室の空間構成の類似は、すでに見たように、1852年にC. ダリーによって指摘されているが、ここではさらにいくつかの微細な類似点を列挙することとする。

まず重要なのは支柱の細さであろう。C. ダリーも前述の記事において、国立工芸学院の図書館の支柱を「際だった軽やかさの円柱」（colonne d'une légèreté remarquable）と叙述し、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の支柱を同様に「軽やかな円柱」（légères colonnes）と描写している²⁸⁾。シャフトの基部での直径が25cm、頂部での直径が僅かに18cmというサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の鑄鉄の支柱の細さは改めて指摘するまでもないが²⁹⁾、国立工芸学院の図書館の支柱もまた、基部で38cm、頂部で22cmという石造の支柱としては驚くべき細さを誇っている³⁰⁾。この支柱についてはヴォードワイエ自身も、「並はずれた細さとエレガントさを有する円柱」（colonnes d'une finesse et d'une élégance extrêmes）と描写しており³¹⁾、また同図書館の開館を報じた建築雑誌の記事においても「その軽やかさが際だつ7本の背の高い細円柱」（sept hautes colonnettes remarquable par leur légèreté）という表現が見られる³²⁾。ヴィオレ＝ル＝デュクも、これを「著しく背が高く、また極端にかぼそい直径を有する石造の円柱」（colonnes de pierre d'une hauteur considérable et d'un diamètre extrêmement faible）と描写している³³⁾。

以上のごとく、当時の建築の専門家たちは、一様にこのゴシック建築の支柱の特筆すべき細さを称賛している。このことからG. ドゥブロックが指摘するように、この細い支柱がラブルーストの鑄鉄の支柱の使用にインスピレーションを与えたと考えることは十分に可能であろう³⁴⁾。ラブルーストは、この鑄鉄のコンポジット

図6 (左): サント=ジュヌヴィエーヴ図書館のヴォールト
図7 (右): 国立工芸学院の図書館のヴォールト

風の細円柱を、閲覧室の大空間の中央にきわめて象徴的に並べた。この配置もまた、旧サン=マルタン=デ=シャン修道院の食堂からの影響と考えられるわけであるが、これにより極限まで繊細化された支柱が空間全体に緊張感を与え、明るく軽快な空間の質を作り出している。このような鉄の支柱の扱いは、先行する鉄骨の構造物とこの図書館建築とを隔てる重要な点である。そして、そこで用いられている建築言語こそ古典主義様式のそれであるものの、誕生した空間にはゴシック建築からの影響を見出すことが可能であろう。

2つの建築の類似点としてもう1点注目すべきは、ヴォールトの支持方式である(図6・7)。両者とも、2廊に分かれた閲覧室のヴォールト天井を中央の円柱列で受けているが、壁側に目を向けると、サント=ジュヌヴィエーヴ図書館のヴォールト天井のアーチは渦巻状の持送りで支えられていることがわかる。一方、国立工芸学院の図書館のヴォールトは、壁沿いの、あたかも宙に浮いているかのようなシャフトで受けられ、そのシャフトはキュー・ド・ランプと呼ばれるゴシック建築に特有の装飾的な持送りで支えられている。この、宙に浮いたシャフトと持送りでヴォールトを支持するという構成は、ヴォールトを支持するための堅牢な支柱は必要ないということを逆説的に示唆しているかのようで、このことが、中央の円柱の細さと相俟ってきわめて軽快な印象を作り出している。

ラブルーストは、1868年に開館した国立図書館において、石造の壁体から独立した16本の鉄の支柱によって鉄の9つのドームを支持する構造を完成させた。ギーディオンはこのことを指して、「国立図書館において、ラブルーストはこのシステムを完全なものにした……(略)……鉄の円柱からなる鉄の骨組みは、壁から独立して自立している³⁵⁾」と、サント=ジュヌヴィエーヴ図書館から国立図書館に至る金属の構造システムの進歩を指摘している。だが、金属の構造システムとしては不完全であったとしても、中央の繊細な円柱列と壁側の持送りで金属のアーチを受けるサント=ジュヌヴィエーヴ図書館のデザインは、国立図書館と同様の軽快な印象を作り出すことについて、すでに成功しているといえよう。そしてラブルーストが鉄を用いた建築の最初の試みにおいて、金属の支柱ではなく持送りでアーチを受けるという特異な構造形式を採用した背景に、ヴォードワイエが修復に取り組んでいたゴシック建築からの影響を見ることも可能であると考えられる。

以上のごとく、ラブルーストのサント=ジュヌヴィエーヴ図書館とヴォードワイエの国立工芸学院の図書館のあいだの直接的な影響関係こそ明らかにできないものの、両者のあいだに何らかの影響関係があった可能性は高い³⁶⁾。ラブルーストが考案した、鉄の支柱が軽々とヴォールトを支える空間構成は、ラブルースト自身のプロジェクトを遡って探してみても先例がなく³⁷⁾、この13世紀のゴシック建築からインスピレーションを受けた可能性は高いといえよう。

続いて以下では、サント=ジュヌヴィエーヴ図書館の開館4年後に、同じくパリに建設された鉄の支柱を持つ建築、サントウージェーヌ教会堂と、上述の2つの建築との関係を考察する。

5. L-A. ボワローのサントウージェーヌ教会堂

建築家ルイ=オーギュスト・ボワロー(1812-1896年)は、B. フーカルも指摘している通り、建築の歴史のなかでその名が重視されることはほとんどなかった³⁸⁾。その息子であるルイ=シャルル・ボワロー(1837-1914)の方がまだしも、技師ギュスターヴ・エッフェルとともにパリ最古の百貨店建築ボン・マルシェを手掛けた建築家として、その名が知られているといえよう³⁹⁾。ボン・マルシェ百貨店(1876年)もまた、その大規模な鉄骨構造は鉄の建築の歴史を考える上で重要であるが、先に建築における鉄の可能性に気づき、理論化、実践したのは父ルイ=オーギュスト・ボワローであった。

1812年にパリで生まれたL-A. ボワローは、人生の前半を木工職人として過ごした。木工職人として彼が手掛けた作品には、コンピエーニュのサンタントワヌ教会堂の説教壇(1834-37年)、パリのサン=ジェルマン=ロクセロワ教会堂のパイプオルガンの外装箱(1839年)、エール=シュル=ラ・リスのサン=ピエール教会堂の内陣仕切(1840-42年)などが挙げられる⁴⁰⁾。

その彼が人生の半ばにして初めて手掛けた建築作品がパリのサントウージェーヌ教会堂(1854-55年)である。ゴシック様式を模して建てられたこの建築は、外壁こそ石造であるものの、支柱やリブといった骨組みから天井に至るまで、すべてに鉄が用いられ、鉄を用いたゴシック建築の可能性が極限まで追求されたものになっている⁴¹⁾。この建築に着手する前年、ボワローは建築における鉄の可能性を論じた『新たな建築形態⁴²⁾』を発表しており、サントウージェーヌ教会堂はその実践とも位置づけられるものであった。

教会堂は交差廊を有さない5廊式の長方形平面であり、中央の身廊は幅10m、六分ヴォールトが4回繰り返される8ベイからなる。その両脇の側廊は幅5m、もっとも外側の側廊だけは2層になっており、幅2.5mで1階部分はチャペルのような役割を果たしている。

6. サントウージェーヌ教会堂をめぐる論争

このサントウージェーヌ教会堂をめぐるのは、ヴィオレ=ル=デュクとボワローとのあいだに激しい論争が巻き起こった⁴³⁾。論争の発端となったのは、理工学校エコール・ポリテクニクの出身でサン・シモン主義の経済学者として知られるミシェル・シュヴァリエ(1806-1879年)の記事であった。1855年のパリ万博に関連して1855年6月に発表された「万国博覧会：記念碑的建造物に使用された鉄と鋳鉄」と題されたこの記事の中でシュヴァリエは、同年12月に竣工することになる、記事の発表時は建設中であったボワローのサントウージェーヌ教会堂を大きく採り上げ、これを称賛した⁴⁴⁾。シュヴァリエは以

下のようにこの建築を紹介する。

「好事家たちは、クリスタル・パレスの内部だけにではなく、パリの城壁の内側にも、鑄鉄と鉄のモニュメンタルな別の建物を見ることが出来る……(略)……サントウージェーヌ教会堂である。建築家ボワロー氏は、ゴシックの形態を採用し、それがこの新しく目覚ましい材料に、ここではよく適応していた⁴⁵⁾。」

シュヴァリエがクリスタル・パレスと対比してサントウージェーヌ教会堂に言及していることは注目に値するが、本稿においては、シュヴァリエの以下の記述が一層興味深い。

「ボワロー氏は、サントウージェーヌ教会堂において、ゴシック様式を、特にリブ・ヴォールトを完全に再現しながら、大規模に鉄と鑄鉄を導入した。石材は外側の仕切り壁に用いられたのみである。内部は完全に鑄鉄と鉄だけで作られており、それは天井さえも同様である。支柱は鑄鉄製で、旧サン＝マルタン＝デ＝シャン修道院の食堂、現在の工芸学院の図書館のヴォールトを支持する石造の円柱をモデルとしている。その直径の平均は32cmであり……(後略)⁴⁶⁾」

ここでシュヴァリエが指摘している通り、サントウージェーヌ教会堂の支柱は、八角形の背の高い台座の上に置かれ、その円柱の高さの中間付近で、刳型装飾の施されたリングによって上下に二分されるという、サン＝マルタン＝デ＝シャン修道院の支柱のデザインをコピーしたものとなっている。すなわちこの建築は、ヴォードワイエによって修復されたばかりの国立工芸学院の影響を受けた建築と位置づけることができるものなのである。

シュヴァリエの論説において、サントウージェーヌ教会堂は全体として、鉄とゴシック様式の融合がもたらした、その経済性ゆえに高く評価されていた。ところが、この記事に即座に反応して激しい調子で反論したのがヴィオレ＝ル＝デュクであった。彼は雑誌*Encyclopédie d'architecture* のディレクター、A. ランスに宛てた手紙という形で反論を著し、これは直ちに同誌の1855年6月号の巻頭記事として掲載された⁴⁷⁾。シュヴァリエが賛美する鉄と鑄鉄の建築について、ヴィオレ＝ル＝デュクの意見は以下のようなものであった。すなわち、巨大建造物における金属の使用の可能性を認めないわけではない。それらはすでに、鉄道駅や市場の大部分を覆っている。「しかしそれらの建造物は、際限なく繰り返すことのできる単一の形態にのみ適応可能な、きわめて単純な平面を有する倉庫でしかない、ということを忘れてはならない⁴⁸⁾。」

さらに、シュヴァリエが鉄を用いた教会建築を称賛したことを受けて、ヴィオレ＝ル＝デュクはサントウージェーヌ教会堂を、さらにはボワロー個人をも攻撃しはじめる。

「少なくとも一般大衆や聖職者たちがこの建物の内部に入り、これをモデルとして示すことができるようになるまでは待った方がよい。この混合建築の考案者による図面を見る限り、この構造物の寿命について、我々は大きな信頼感を感じるができない。外観についてどうかというと、それは美しい⁴⁹⁾。」

この教会堂はこの年の12月に竣工したため、ヴィオレ＝ル＝デュクはこの時点では内部を見ることなく、その外観は美しいと断言したわけであるが、そのボワローに対する態度はきわめて攻撃的であるといえよう。だが彼の攻撃はこれにとどまらない。

「サントウージェーヌ教会堂の建設の指揮を執るボワロー氏は、何らかの技術者ではあるかもしれないが、建築家ではない。彼はもとは、非常に腕の良い木工細工職人だったのであり、例えばどのような経験

を積んできたとしても、それは建築の実践的な初等教育に変わるものではないのである⁵⁰⁾。」

このように2歳年長のボワローに対するヴィオレ＝ル＝デュクの嘲罵は苛烈をきわめている。ボワローも即座にA. ランスに宛ててヴィオレ＝ル＝デュクに対する反論を著し、*Encyclopédie d'architecture* の1855年7月号に掲載されるが、ランスの計らいにより、そこにはボワローの手紙に対するヴィオレ＝ル＝デュクの再反論も同時に掲載された⁵¹⁾。

個人攻撃にまで発展したヴィオレ＝ル＝デュクの批判に対するボワローの反論を悉に見ていくことは本稿の意図するところではない。鉄の建築の歴史を考える上で重要なのは、ヴィオレ＝ル＝デュクの最初の手紙に書かれた以下の一節と、その部分に対するボワローの反論である。ヴィオレ＝ル＝デュクは「外観についてどうかというと、それは美しい⁵²⁾」に続いて以下のように述べる。

「我々には以下のように思われる。この仕事によって建てられた大建造物は、太陽の方角や気温の変化に応じて、絶え間ない工事を必要とするであろう。そしてまたこの仕事は、特に都合良く拙劣に金属と混合された石造部分は、早々に倒壊することになるであろう。なぜならば鉄と石積みとが調和していないからである。切り妻の頂部に受けられている鉄のアーチは満足のゆくバランスをとっておらず、そして最終的に、そのすべての堅牢性が組み立ての極端なまでの正確さの内に存在するこのシステムは、建築家の技術よりも機械家の技術に近いものである⁵³⁾。」

これに対してボワローは次のように反論する。

「そのうえ、この批評家が言うように、比較対象が足りないわけでない。穀物市場の鉄のドームが完成したのは昨日のことではない。サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の大ホール、数多くの鉄道の駅、アンヴェールの証券取引所、その他多くの金属の構築物が、〔金属の〕恐ろしい膨張の効果やその他の我々を脅かすものについて、すでに我々を安心させている……(後略)⁵⁴⁾」〔 〕内は筆者による補足

ボワローの反論中、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館に言及しているのはこの1箇所のみである。だが、これに対してヴィオレ＝ル＝デュクは、その再反論で過敏ともいべき反応を示している。

「我々は最初から、鉄道の駅や市場などの屋根に金属が用いられていることに言及している。そして単純な平面構成の建造物における金属の使用は、その有用性ゆえに定着したと指摘している。にもかかわらず何故、ボワロー氏は次の一文によって、我々をこの主題に引き戻そうというのであろうか。『そのうえ、この〔批評家〕(私のことである)が言うように、比較対象が足りないわけでない……。』そして彼は、我々に以下の実例を示す。穀物市場、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館、鉄道駅など。これらの建造物とボワロー氏の積層するドームで構成されるシステム⁵⁴⁾とのあいだに、いかなる関係があるというのか。ボワロー氏は、彼と同様に我々も称賛するサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の屋根と同じような屋根を作ったからといって、自らを革新者であると主張しているのであろうか。何故ボワロー氏は、我々が攻撃していない建物を抛り所にしようというのか。いかなる目的で彼は、我々が彼をH. ラブルースト氏と同じ水準に置こうとしていると誤解させようとするのか。それは我々の意図するところではない⁵⁵⁾。」

ボワローがサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の名を挙げたことに対するヴィオレ＝ル＝デュクの過剰とも思えるこの反応は興味深い。この論争が交わされた4年前に開館したサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館は、ヴィオレ＝ル＝デュクにとってもそれだけ革新的

な建築であったということであろう。あるいは、彼はボワローの本心を見抜いていたのかもしれない。サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の開館以降、1850年代のパリでは中央市場やパリ万博の産業宮など巨大な鉄骨建築が登場するが、それらはいずれもヴィオレ＝ル＝デュークが「きわめて単純な平面を有する倉庫でしかない」と断じたビルディング・タイプであった。サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館に続くモニュメントはサントウージェーヌ教会堂に他ならないという自負が、ボワローの胸中になかったとはいえまい。実際にそのような位置づけが可能な建築であるからこそ、ヴィオレ＝ル＝デュークはここまで辛辣な批判を浴びせたのではなかろうか。

他方、ボワローがその教会堂の支柱のデザインをサン＝マルタン＝デ＝シャン修道院の食堂から引用したことについて、ヴィオレ＝ル＝デュークは多くを語らない。唯一の言及は、ボワローが彼の著述『新たな建築形態』において、一般に鑄鉄は石材のためのデザインをコピーするためのものと考えられているが自分はその逆を行く、と宣言していることとの矛盾を批判した箇所のみである⁵⁶。またボワローがその支柱のモデルとして、サン＝マルタン＝デ＝シャン修道院の食堂の支柱を選んだことについての、ヴィオレ＝ル＝デューク自身の見解は存在しない。

ところが、この論争の2年後の1857年に出版されたヴィオレ＝ル＝デュークの『中世建築辞典』の第3巻には、興味深い記述が見られる。辞典中、「円柱」に関する項目で、彼はサン＝マルタン＝デ＝シャン修道院の食堂の支柱に言及する。

「13世紀の初めにはなお、付柱のない円筒形の円柱が用いられ、この時代の建築家たちの方針により、支柱と支柱とのあいだに可能な限り大きな空隙が残されるように、材料の質が許す範囲でその直径を小さくしようと努められた。それはしたがって、同じようなケースにおいて木材や金属の支柱に与えられるのとほとんど同等の痩せ方をした円柱でヴォールトを支えられるということである。パリのサン＝マルタン＝デ＝シャン修道院の食堂は、著しい背の高さと極端にかぼそい直径を持つこのような石造の円柱の、我々に残された最良の実例の1つである。しかしこれは、八角形の土台の上に置かれ、その円柱の高さの中間付近で刳型で装飾されたリングで2つに分けられるという巧みな構成により、その過度な痩せ方に目がショックを受けないように、またそれらの円柱がそのラッパ型の柱頭の上に2列のヴォールトを支えるのに、実際通り充分な強度を持っているように見せている⁵⁷。」(傍点筆者)

ヴィオレ＝ル＝デュークがここで円柱を形容した「かぼそい」(faible)、「痩せ方」(maigreur)といった表現は、その数年前に批評家たちや建築家ヴォードワイエ自身が同じ円柱を形容した「軽やかさ」(légèreté)、「細さとエレガントさ」(finesse et élégance)といった表現と比較したとき、必ずしもこれを称賛しているわけではないようにも見える。しかしながら、「金属の支柱と同等の痩せ方」を持つ13世紀のゴシック建築の支柱のなかでも、サン＝マルタン＝デ＝シャン修道院の食堂の円柱の構成については、ゴシック建築の大儒ヴィオレ＝ル＝デュークならではの高い評価を与えていることがわかる。だが、この評価をボワローのサントウージェーヌ教会堂の鑄鉄の支柱に照らし合わせてみると、ボワローがその支柱のデザインのモデルにサン＝マルタン＝デ＝シャン修道院の食堂のそれを選択したことは、ヴィオレ＝ル＝デュークにとっても道理にかなっていたといえよう。しかしながら彼はこの点においてもボワローを評価することはなく、ただ批判を浴びせるのみであったため、『中世

建築辞典』を執筆したときにボワローの鑄鉄の支柱を念頭に置いていたかどうかは不明である。他方ボワロー自身も、いかなる理由で国立工芸学院の図書館として再生したばかりのサン＝マルタン＝デ＝シャン修道院の食堂の支柱をモデルとしたのかということについて、この論争の時点では沈黙している⁵⁸。

1850年代のパリにおいて、国立工芸学院の図書館の開館は決して些細な出来事ではなかったが、当然参照されるべきというほどの大事件でもなかった。当時は、様々な側面で中世建築の再評価が成された時期であったが⁵⁹、サン＝マルタン＝デ＝シャン修道院の食堂は名作であるとしても小品に過ぎなかった。ヴィオレ＝ル＝デュークの『中世建築辞典』での評価に先立って、ボワローがサン＝マルタン＝デ＝シャン修道院の食堂の円柱をモデルとして鑄鉄の支柱をデザインしたとき、純粋に優れたゴシック建築としてこれを参照したとは考えがたい。彼はその背後にサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館を見てはなかったであろうか。これまで再々参照してきた通り、2つの図書館建築の類似は1852年にはすでに建築雑誌上で指摘されていた。したがって、ヴィオレ＝ル＝デュークが敵愾心もあらわに示唆したように、ボワローが自らをラブルーストの後継的な革新者だとみなしていたとすれば、彼が鉄のゴシック建築を企図する上でサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館との類似が指摘されているゴシック建築を参照したという可能性は十分に考えられるのである。

7. 結

国立工芸学院の図書館からサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館への影響については、その平面構成の類似がこれまでもたびたび指摘されてきた。本稿はここに、平面構成の影響ばかりでなく、新しい素材と構造によって将に誕生せんとしている新しい建築空間への、ゴシック様式からの影響を見出したものである。これら2つの図書館建築のあいだでゴシック建築から鉄骨建築への翻案が成されたとき、そこでは平面構成ばかりではなく、支柱の繊細さとその緊張感によって生じる軽快な空間の質も重要であったと考えられる。そのことは、サントウージェーヌ教会堂において、国立工芸学院の図書館のゴシックの支柱が鑄鉄でコピーされて用いられたという事実からも確認できよう。鉄の建築はその黎明期において、ゴシックの支柱の細さを鑄鉄の技術によって容易に獲得しながら、新しい時代の軽やかな空間を作り上げていったものと考えられる。

謝辞 本稿は、日本学術振興会海外特別研究員(平成16年度)の派遣先での研究活動の一部をなすものです。記して謝意を表します。

注

- Lucien DUBÉCH et Pierre D'ESPEZEL, *Histoire de Paris*, Payot : Paris, 1926, p.464. この一節はW.ベンヤミンの『パサーージュ論』として知られる一連の覚え書きにも、「鉄骨建築」のカテゴリーのなかで引用されている。本文中の引用は、W.ベンヤミン『パサーージュ論』第1巻、今村仁司、三島憲一ほか訳、岩波現代文庫、2003年、p.369、[F4a,5]による。
- ラブルースト以前のフランスにおける鉄を用いた主要な構造物としては、テアトル・フランス(1786年)、ボン・デザール(1801年)、穀物市場(1811年)、マドレーヌの市場(1824-38年)、ギャルリー・ドルレアン(1829-31年)、パリ植物園の温室(1834-36年)、パリ＝ヴェルサイユ路線の鉄道車庫(1837年以降)などが挙げられる(Bertrand LEMOINE, *L'architecture du fer. France : XIX^e siècle*, Édition du Champ Vallon, 1986.)。
- Sigfried GIEDION, *Building in France, Building in Iron, Building in Ferroconcrete*, trans. J. Duncan Berry, The Getty Center, 1995, pp.103-104.
- ibid.*, p.104.
- ibid.*, p.103.
- 本稿では19世紀に登場した鉄とガラスの〈仮設的な〉ビルディングタイプに

- 対立する概念として「モニュメント」を用いた。当時の「モニュメント」の概念を厳密に定義するには、それだけでも一編の論考が必要になろうが、ここでは仮設的な鉄の構造物に対比して、永続的な建築を指すものとする。
- 7 Bruno FOUCART, "Henri Labrousse et ses contemporains", *Les monuments historiques de la France*, t.6, 1975, p.7
 - 8 1824-38 年にはすでにパリでマドレーヌ市場が建設されており、鑄鉄の支柱の使用自体は、必ずしもラブルーストが最初というわけではない。
 - 9 V. バルタルが最初に手掛けた石造の中央市場は 1853 年にナポレオン三世の命により建設途中で取り壊され、1854 年より鉄とガラスの新しい中央市場が建設された (Haussmann, *Mémoires*, Seuil, 2000, pp.1072-1073)。
 - 10 技師のパローとブリデルによって設計された万博会場。1900 年のパリ万博の際、新会場の建設のために取り壊された (B. LEMOINE, *Op. Cit.*, pp.219-220)。
 - 11 B. フーカールもまた、「ラブルーストの真の弟子はルイ＝オーギュスト・ボワローであろう」と指摘している (B. FOUCART, *Op. Cit.*, p.8)。
 - 12 イギリスでは 1813-18 年に、T. リックマンによって 3 棟の鑄鉄製ネオ・ゴシックの教会堂が建設されている (B. LEMOINE, *Op. Cit.*, p.173)。イギリスと比してフランスのゴシック・リヴァイヴァルは修復の側面が強かったと考えられるが、鉄に注目しても、シャルトル大聖堂の小屋組 (1837) やルーアン大聖堂の尖塔 (1837-63) などの修復において、早くから鉄が用いられていた。
 - 13 César DALY, "Réfectoire de l'Abbaye de Saint-Martin", *Revue général de l'architecture*, t.10, 1852, p.62. 両者の類似については、その後の建築史研究においてもしばしば指摘されている (B. LEMOINE, *Op. Cit.*, p.238; Barry BERGDOLL, *Léon Vaudoyer. Historicism in the Age of Industry*, MIT Press, 1994, p.165.; Geneviève DEBLOCK, "Le Conservatoire national des arts et métiers", Myriam BACHA et Christian HOTTIN (dir.), *Les bibliothèques parisiennes : architecture et décors*, Paris, 2002, p.146). 他方、D.V. ザンテンは両者のあいだに構造的な関係はないと主張する (David Van ZANTEN, *Designing Paris. The Architecture of Duban, Labrousse, Duc, and Vaudoyer*, MIT Press, 1987, p.98.)。
 - 14 Henri LABROUSTE, "à M. le Directeur de la Revue d'architecture", *Revue général de l'architecture*, t.10, n.11-12, 1852, p.381.
 - 15 *ibid.*, p.382.
 - 16 Henri DELABORDE, *Notice sur la vie et les ouvrages de M. Henri Labrousse*, Paris, 1878, p.6; Pierre SADDY, *Henri Labrousse architecte 1801-1875*, Caisse Nationale des Monuments Historiques et des Sites : Paris, 1977, p.4; *Visions. Bibliothèque Sainte-Geneviève*. Catalogue de l'exposition "Voir et revoir l'œuvre de Labrousse", 11 octobre - 9 novembre 2001, Bibliothèque Sainte-Geneviève : Paris, 2002, p.7.
 - 17 B. BERGDOLL, *Léon Vaudoyer*, pp.43-44; B. BERGDOLL, *Les Vaudoyer. Une dynastie d'architecture*, Éditions de la Réunion des musées nationaux, 1991, p.33.
 - 18 P.SADDY, *Op.Cit.*, p.8, *Visions*, pp.7-8; B.BERGDOLL, *Les Vaudoyer*, p.40.
 - 19 D.V.ZANTEN, *Op. Cit.*, p.4
 - 20 Léon Labrousse, *La bibliothèque nationale. Ses batiments et ses constructions*, Paris, 1885, p.45.
 - 21 S.GIEDION, *Op.Cit.*, p.106.
 - 22 D. V. ZANTEN, *Op.Cit.*, p.89; *Visions*, p.9.
 - 23 *Visions*, p.10
 - 24 Louis ANDRÉ, "Léon Vaudoyer et le Conservatoire des arts et métiers", *La revue : Musée des arts et métiers*, n.16, septembre 1996, p.37.
 - 25 B. BERGDOLL, *Léon Vaudoyer*, pp.165-166.
 - 26 「図書館としてのみ役立てられる公共の建築が建設されたのは、フランスにおいて初めてのことであった。」(César DALY, "Des bibliothèques publiques", *Revue général de l'architecture*, t.8, n.11-12, 1849-50, p.416.)
 - 27 国立工芸学院は、ヴォードワイエ以前から 40 年にもわたって前任の建築家たちによって計画され続けていた。旧サン＝マルタン＝デ＝シャン修道院が修道院長グレゴワールの発案により国立工芸学院に転用されることが決定したのは 1794 年。この建築計画に最初に携わった建築家 F. ドラノワ (1798-99 年、在任) による計画図面によれば、修道院の食堂は取り壊されることになっている。しかしながら続いてこの任に就いた建築家 C.-J.-B. ジャイエ (1800-06 年、在任) は、敷地内の多くの古い建築群を取り壊したものの、経済的な理由から食堂の取り壊しを断念した。以降、この食堂は保存されることとなり、その後の建築家 A.-M. ペイール (1806-32 年、在任)、V. デュボワ (1832-38 年、在任) を経て、ヴォードワイエ (1838-72、在任) の下で図書館として生まれ変わった。(B. BERGDOLL, *Léon Vaudoyer*, pp.142-167.)
 - 28 C. DALY, *Op.Cit.*, p.62.
 - 29 *Encyclopédie d'architecture*, t.3, 1853, Pl.28. 円柱の高さは約 4.5m。
 - 30 G. DEBLOCK, *Op.Cit.*, p.145. 円柱の高さは約 8.2m。
 - 31 Léon VAUDoyer, "Études d'architecture en France : Couvents et abbayes", *Magasin Pittoresque*, t.8, 1840, p.167.
 - 32 Adolph LANCE, "Conservatoire des arts et métiers. Ouverture de la bibliothèque", *Moniteur des architectes*, t.5, 1852, pp.3-6.
 - 33 E.E. VIOLLET-LE-DUC, "Colonne", *Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XI^e au XVI^e siècle*, t.3, 1857, p.497.
 - 34 G.DEBLOCK, *Op.Cit.*, p.146.
 - 35 S. GIEDION, *Op.Cit.*, p.107.
 - 36 両者のあいだの影響関係を示すものの一つとして、ガス灯による照明を挙げ

- る先行研究もある。「講座と同じくこの図書館も、夜間も開館することになっていたため、わずか 2 年前のラブルーストのサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館が先駆となった、ガス照明のための準備が成された。」(B. BERGDOLL, *Léon Vaudoyer*, p.167.) ここで指摘されているのはラブルーストからヴォードワイエへの影響であるが、同時期に同じ図書館建築を手掛けていた 2 人の建築家のあいだに交流があったことを示す傍証の一つにはなろう。
- 37 唯一、サント＝ジュヌヴィエーヴ図書館の鑄鉄の支柱に似た形態を有するものとしては、ラブルーストが 1836 年から 1840 年にかけて手掛けたコンコルド橋の街灯デザインが挙げられる (拙稿、「19 世紀パリにおけるガス灯の導入と、建築家による街灯のデザイン—鑄鉄の円柱の誕生—」、2006 年度大会学術講演梗概集 F-2, pp.199-200)。
 - 38 Bruno FOUCART, "La «Cathédrale synthétique» de Louis-Auguste Boileau", *Revue de l'art*, n.3, 1969, p.49.
 - 39 S.GIEDION, *Op.Cit.*, p.115-119. ただし同書では、鉄骨の建築に関する初期の重要な著作として、Louis-Auguste BOILEAU, *Le fer, principal élément constructif de la nouvelle architecture*, Paris, 1871. が紹介されており、1855 年のパリ万博産業宮と同年に建設されたサントウージェーヌ教会堂にも触れられている (S. GIEDION, *Op.Cit.*, pp.103, 124.)
 - 40 Bernard MARREY (présentation de), *La querelle du fer. Eugène Viollet-le-Duc contre Louis Auguste Boileau*, Édition du Linteau : Paris, 2002, p.117.
 - 41 同時期のイギリスでも鉄骨のゴシック・リヴァイヴァル建築、ディーン&ウッドワード事務所によるオックスフォード大学博物館が誕生している。鑄鉄の支柱が立ち並び、ガラスのトップライトから明る光が降り注ぐ中庭空間は、ボワローのサントウージェーヌ教会堂が鉄という材料を用いながらも、あくまで石造のゴシック建築を模したのと同対照的に、きわめて近代的な空間となっている。オックスフォード大学博物館は 1854 年にコンペで設計者が決定し、1855 年 6 月に着工、1860 年に完成しているので、ボワローの方が僅かに先行していることになる。B. ハワードは、この建築が、1853 年に *The Builder* 誌上でイギリスに紹介されたサント＝ジュヌヴィエーヴ図書館ときわめて近い精神を有していると指摘している (Birkin HAWARD, *Oxford University Museum. Its architecture and art*, Oxford University Museum, 1991, p.10)。
 - 42 L.-A. BOILEAU, *Nouvelle forme architecturale*, Paris, 1853.
 - 43 建築雑誌上で戦わされたこの激論は、近年出版された『鉄に関する論争 E. ヴィオレ＝ル＝デューク対 L.-A. ボワロー』に再録されている。(B. MARREY, *Op. Cit.*)
 - 44 *Journal des Débats*, 1er juin 1855. (B. MARREY, *Op. Cit.*, pp.56-76 に再録)
 - 45 B. MARREY, *Op.Cit.*, p.68.
 - 46 *ibid.*, p.69.
 - 47 VIOLLET-LE-DUC, "A. M. Adolphe Lance", *Encyclopédie d'architecture*, t.5, n.6, 1855, pp.81-87 (B. MARREY, *Op. Cit.*, 78-86 に再録).
 - 48 B. MARREY, *Op. Cit.*, p.81.
 - 49 *ibid.*, p.82. ヴィオレ＝ル＝デュークが石材と鉄の混構造のアイディアを図面で発表したのは 1864 年の『建築講話』の補図と 1872 年の『建築講話』第 2 巻においてであり、したがってボワローの 10 年以上後のことである。
 - 50 *ibid.*, p.83.
 - 51 L.-A. Boileau, *Encyclopédie d'architecture*, t.5, n.7, 1855, pp.100-105.; E.E. Viollet-le-Duc, *Encyclopédie d'architecture*, t.5, n.7, 1855, pp.105-110 (B. MARREY, *Op. Cit.*, pp.87-97, 98-107 に再録)。
 - 52 B. MARREY, *Op. Cit.*, pp.82-83.
 - 53 B. MARREY, *Op. Cit.*, p.94.
 - 54 L.-A. BOILEAU, *Nouvelle forme architecturale*, Paris, 1853. で提唱された «composition synthétique» のこと。
 - 55 B. MARREY, *Op. Cit.*, p.105.
 - 56 *ibid.*, p.103.
 - 57 VIOLLET-LE-DUC, "Colonne", *Dictionnaire raisonné...*, t.3, 1857, p.497.
 - 58 1886 年に発表された *Histoire critique de l'invention en architecture* で、ボワローは次のように説明している。「独立柱の場合、中世の工匠たちの離れ業によって石材で成し遂げられた類似希な型が、完全に鑄鉄に適用可能なモデルを提供している。旧サン＝マルタン＝デ＝シャンの食堂 (現国立工芸学院の図書館) の石で作られた単円柱は、その金属のような振舞いのおかげで、もしそれが鑄鉄で再現されたならば、鉄骨の規模にきわめて相応しいように思われる。そしてそのことは、サントウージェーヌにおいて正しいと認められた。」(L.-A. BOILEAU, *Histoire critique de l'invention en architecture*, 1886, p.134.) この文章には、ヴィオレ＝ル＝デュークによる『中世建築辞典』におけるサン＝マルタン＝デ＝シャンの食堂の円柱に対する評価が反映されている可能性があらう。
 - 59 V. ユゴーの『ノートル＝ダム・ド・パリ』(1831 年) やヴィオレ＝ル＝デュークによるヴェズレーのマドレーヌ教会堂の修復 (1840 年～)、パリのノートル＝ダム大聖堂の修復 (1842 年にコンペ、1845 年から修復開始) など。

本文中の写真は筆者撮影。また図 3 は *Encyclopédie d'architecture*, t.1, 1850, Pl.71 により、図 4 は J.-B.-A. LASSUS, [*Abbaye de Saint-Martin-des-Champs*] *Plan du réfectoire*, BNF Richelieu Estampes et photographies, 1835 により、筆者作図。

(2005 年 12 月 5 日原稿受理, 2006 年 10 月 5 日採用決定)